

興福寺中室・経蔵・鐘樓の発掘調査

法相宗大本山 興福寺
独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部

調査地：奈良市登大路町

調査期間：2015 年 10 月 2 日～（継続中）

調査面積：835.5 m²（中室 202 m²+148.5 m²、経蔵 406 m²、鐘樓 54 m²+25 m²）

現地見学会を開催します。
2015 年 12 月 20 日（日）11:00～15:00 ※小雨決行
説明は、11:30、13:00 の 2 回おこなう予定です。

概要

- 興福寺中室・経蔵・鐘樓の礎石や基壇外装を検出しました。中室・経蔵では、創建当初の建物規模を確認し、再建の際にはその位置や規模を踏襲していることがわかりました。また中室は、西室と建物規模はほぼ同一で、柱配置は異なることがわかりました。
- 経蔵・鐘樓の周辺では石組溝や玉石敷が見つかり、伽藍中核部における建物周辺の様相について、新たな知見を得ることができました。

1. 調査の経緯と目的

興福寺は、藤原不比等が奈良時代はじめ（8 世紀前半）に、平城京の外京である左京三条七坊の地に建立した藤原氏の氏寺です。かつては中金堂院を中心とする大伽藍を誇りましたが、たび重なる火災に遭い、再建が繰り返されてきました。

現在、興福寺では「興福寺境内整備基本構想」（1998 年）に基づき、寺観の復元・整備を進めています。これにもない、奈良文化財研究所では 1998 年以来、中金堂院や南大門などの発掘調査を継続しておこなってきました。今回の調査もその一環です。調査は 2015 年 10 月 2 日より開始し、現在も継続中です。中室は、規模を確認するため南端と北端を、経蔵は、全容を明らかにするため全体を、鐘樓は、規模を確認するため西北部と東南部を、それぞれ調査しています。調査面積は計 835.5 m²、うち 29.5 m²は既調査区との重複部分です。

2. 興福寺中室（東僧房）・経蔵・鐘樓の概要

僧房とは、僧侶が生活する建物です。細長い建物の内部を仕切って多くの小部屋を造ります。興福寺は中金堂と講堂の東・西・北をコの字型に取り囲む三面臨僧房を有しており、東僧房は「中室」と呼ばれました。経蔵とは、お経を収蔵する建物、鐘樓とは、鐘をつり下げて鳴らすための建物です。興福寺では、中金堂の北東に経蔵、北西に鐘樓が建てられました。

中室・経蔵・鐘樓の建立年代は明らかではありませんが、諸資料から、中金堂とその周辺の建物と同じ 720 年代と考えられます。中室・経蔵・鐘樓は、建立以後 8 度ほど火災に遭いました（表 1）。最後の焼失は享保 2 年（1717）のことで、以後再建されることなく現在に至っています。

調査前、経蔵と鐘樓は基壇状の高まりを残しており、地表に礎石の上面が露出していました。中室の北半でも同様に、礎石の上面が地表に露出していました。

3. 主な検出遺構

（1）中室

礎石と柱配置 礎石およびその据付穴や抜取穴を確認しました。礎石は長径 1m 前後で、柱座などの造り出しはありません。桁行（南北）の各柱間には、長径約 50 cm の小型の礎石を 2 基ずつ配置しています。また南面では、各柱間に長径 45～50 cm の小型の石を 3 基ずつ配置しており、この上に壁を受ける木製の部材（地覆）を置いたと考えられます。残存する礎石は、ほとんどが創建当初の位置を保っています。今回の調査では、中室のうち北端の桁行（南北）1 間×梁行（東西）3 間分、および南端の桁行 1 間×梁行 3 間分を検出しました。

基壇 基壇は、固い礫層の地山を削り出して造られており、一部ではその上に積み土を確認しました。基壇の規模は、南北が約 66.7m（226 尺）で、東西は調査区外に延びるため不明です。基壇外装は、地覆石と羽目石を確認しました。いずれも凝灰岩製です。

これらから復元される柱配置は、図 7 のようになります。これは『興福寺流記』に記されている寸法とは異なります。また西室の発掘調査（2013・2014 年度）の成果と比べると、建物の規模はほぼ同じですが、柱配置は異なります。

南北溝 中室の西辺に沿って北流する石組溝。幅約 65 cm、深さ約 35 cm。側石に長径約 80 cm の自然石を用いています。中室北端・経蔵・中室南端の 3 つの調査区にまたがって検出し、これまでの調査も合わせると、総延長は約 70m になります。側石の様相から、中世に築造された可能性があり、埋土に含まれる遺物の年代から、明治時代に入って廃絶したと考えられます。江戸時代の絵図には、中室の北端で西に折れ、北僧房の南端に沿って西流する溝の様子が描かれており、興福寺境内の基幹排水路の一つとみられます。中室と併存している期間は、その西面の雨落溝としても機能していた可能性があります。

東西溝 1 中室の北で検出した東西方向の石組溝。幅 40 cm 以上、深さ約 10 cm で、約 6m 分を検出しました。側石と底石には玉石を用いています。北端の南雨落溝（古代）と考えられます。

(2) 経蔵

礎石と柱配置 経蔵は、桁行3間(約10.1m、34尺)×梁行2間(約6.5m、22尺)の南北棟建物です。桁行・梁行の全長は『興福寺流記』の記載と合致します。柱配置は、図8のとおりです。礎石11基のほか、礎石の据付穴や抜取穴を確認しました。礎石は長径1.0~1.6mで、柱座などの造り出しはありません。残存する礎石は、一部動かされているものもありますが、多くが創建当初の位置を保っています。

基壇 現存する基壇の規模は、南北約15m、東西約11m、高さ約75cmです。基壇は、固い礫層の地山を削り出した上に土を積んでおり、再建の際には補修されています。版築は確認していません。基壇外装は、創建当初のものではありません。南西隅では、室町時代以降に据え付けられたとみられる羽目石の一部が残っていました。しかし、これも近代にはほとんどが抜き取られています。また、雨落溝も未確認です。基壇の東面では、階段の跡の可能性がある高まり(近世)を確認しました。高さは約20cm、幅(東西)は約1.1m、長さ(南北)は約4.2mです。他に、基壇の周囲で建設時の足場とみられる小穴列が見つかっています。

瓦溜 基壇の東面に沿って、幅(東西)約2m、長さ(南北)約12mの範囲に帯状に広がります。瓦の年代は近世が主体で、享保2年(1717)の火災後の片付けにもなって廃棄されたものと考えられます。

東西溝2 経蔵の北を東西に走る石組溝。側石・底石に玉石を用いています。幅約50cm、深さ約10cmで、長さ約19m分を検出しました。東は中室西辺の南北溝(前述)に壊されており、西はさらに調査区外に延びます。鐘樓の北でも、ほぼ同じ位置で同様の石組溝(東西溝3)が見つかっています。これらは、創建期に遡る可能性があり、講堂周辺の排水溝と考えられます。

玉石敷1 東西溝2の北で検出した東西方向の玉石敷。拳大の玉石を敷き詰めており、南側に見切りの石をならべています。幅は1.3m以上で、長さ約19m分を検出しました。鐘樓の北でも、ほぼ同じ位置で玉石敷3を検出しています。

玉石敷2 経蔵の西で検出した南北方向の玉石敷。拳大の玉石を敷き詰めています。幅は約2mで、東西両側に見切りの石をならべています。長さ約9m分を検出しました。東西溝2を挟んでその北にも延び、玉石敷1に接続します。2000年度の調査では、南延長部にあたる位置で玉石敷を確認しており、総延長は約28mになります。

(3) 鐘樓

調査区は西北部と東南部の2ヵ所に設定しました。以下では、西北部の遺構について記します。東南部については調査中です。

礎石と柱配置 礎石は、西北隅の1基を確認しました。長径約1.3mで、柱座などの造り出しはありません。なお、地表に露出している礎石の測量成果によると、鐘樓は、桁行3間×梁行2間の南北棟建物で、桁行全長約10m(34尺)、梁行全長約7.1m(24尺)と推測されます。

基壇 基壇の規模は、西北部の調査のみでは明確ではありませんが、東西12m、南北14.5mほどです。現存する基壇の高さは、35~40cmです。基壇は、固い礫層の地山を削り出して造られており、裾の一部で積み土を確認しました。この他、基壇外装の一部とみら

れる石材(凝灰岩)が残っていました。また、基壇の周囲で建設時の足場とみられる小穴が見つかっています。

東西溝3 鐘樓の北を東西に走る石組溝。側石・底石に玉石を用いています。幅約50cm、深さ約10cmで、長さ約8m分を検出しました。東西はさらに調査区外に延びます。経蔵の北でも、ほぼ同じ位置で同様の石組溝(東西溝2)が見つかっています。これらは、創建期に遡る可能性があり、講堂周辺の排水溝と考えられます。

玉石敷3 東西溝3の北で検出した玉石敷。拳大の玉石を敷き詰めています。幅1.3m以上、長さ約5.5m分を検出しました。経蔵の北でも、ほぼ同じ位置で玉石敷2を確認しています。

4. 主な出土遺物

土器 奈良時代から近代までの土器、陶磁器類が多く出土しています。中室の北端では、ほぼ完形の奈良火鉢が出土しました。

瓦 奈良時代から近代までの瓦が多量に出土しました。軒瓦も多く出土しています。

5. まとめ

①中室・経蔵の創建当初の建物規模と、その後の再建の様相が判明した。

興福寺中室・経蔵・鐘樓の礎石や基壇外装を検出しました。とくに中室の基壇外装は、たいへん良好な状態で残っていました。

中室・経蔵については、創建当初の建物規模を確認し、これまでの中金堂や南大門の調査成果と同じく、再建の際にはその位置や規模を踏襲していることがわかりました。経蔵は、平城京の大寺院では初めて、その全容を発掘調査で確認することができました。

また中室は、西室と全体規模はほぼ同じであるものの、柱配置は異なることが明らかとなりました。その理由については、今後検討していきたいと思えます。

②伽藍中核部における建物周辺の様相について、新たな知見を得た。

経蔵・鐘樓の北では、東西方向の石組溝と玉石敷を検出しました。いずれも中軸線を挟んで東西対称に配置されていたとみられます。また経蔵の西では、南北方向の玉石敷が見つかりました。これらは経蔵や鐘樓と、講堂など周囲の建物との関係を考える上で重要な知見と言えます。石組溝は講堂周辺の排水のための溝、玉石敷は僧房と講堂など建物間を結ぶ通路の可能性があります。

平城京を代表する大寺院の伽藍中核部における空間利用のあり方を知る上で、貴重な情報を得ることができました。

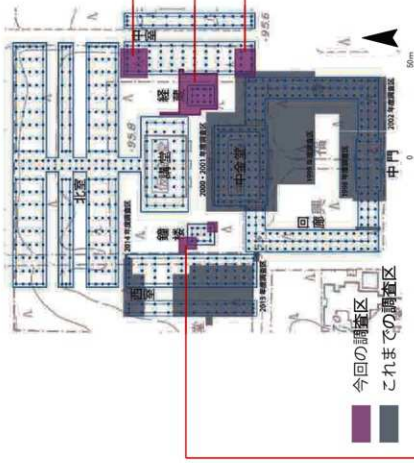


図1 興福寺の伽藍配置と今回の調査区
 (『奈良六大寺大観 興福寺一』挿図1に加筆)

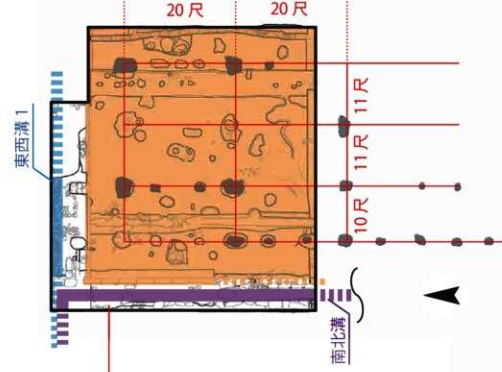


図2 中堂北端遺構平面図 (1:200)

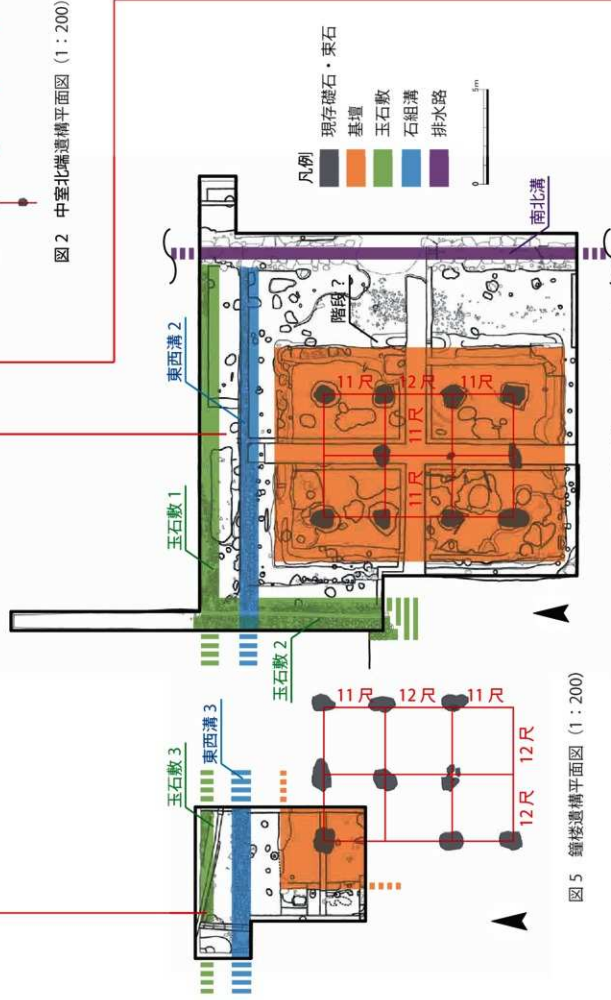


図5 鐘楼遺構平面図 (1:200)

図4 経蔵遺構平面図 (1:200)

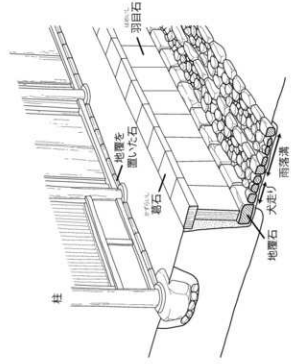


図6 基礎および基壇周囲の様式図

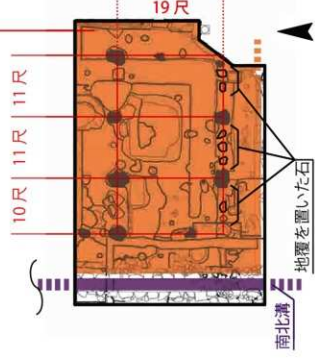
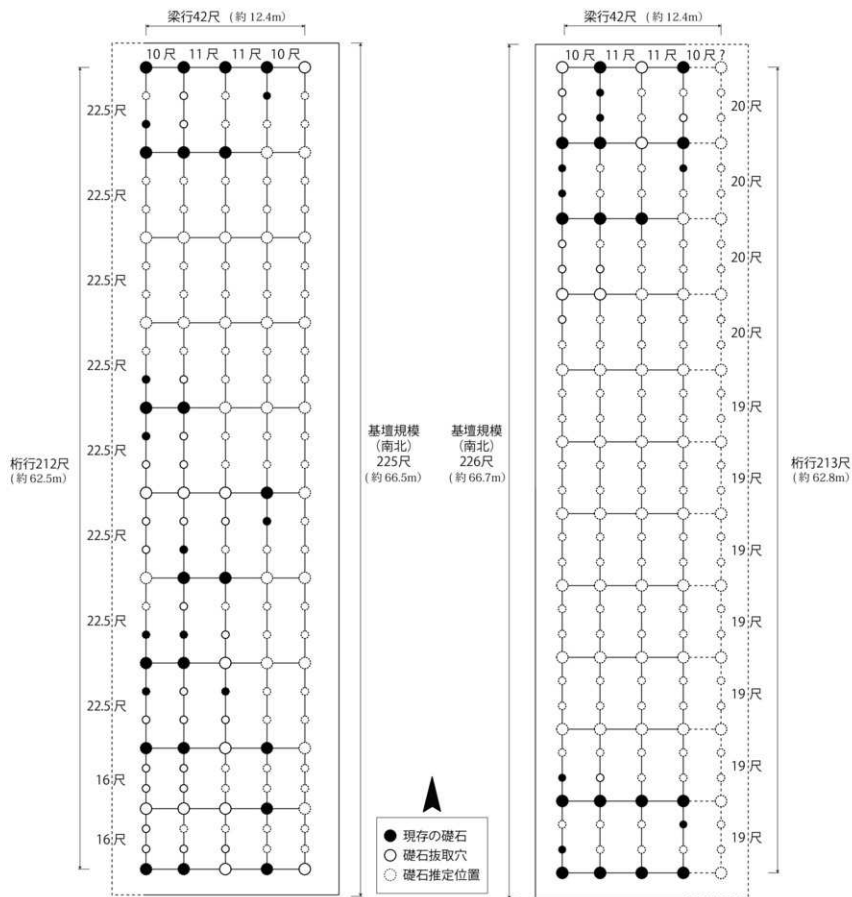


図3 中堂南端遺構平面図 (1:200)



*『奈良文化財研究所紀要』2014・2015 参照

〈参考：西室の柱配置復原模式図〉

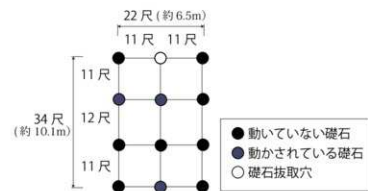


図8 経蔵の柱配置模式図

表1 興福寺中室・経蔵・鐘楼略年表

和暦	西暦	中室	経蔵	鐘楼
	720年代	創建	創建	創建
元慶2	878	?	?	焼失
元慶5	881	?	?	再建
永承元	1046	焼失	焼失	焼失
永承3	1048	再建	再建	再建
康平3	1060	焼失	焼失	焼失
治暦3	1067	再建	再建	再建
永長元	1096	焼失	焼失	焼失
康和5	1103	再建	再建	再建
治承4	1180	焼失	焼失	焼失
養和元	1181		再建	再建
	1200頃	再建		
建治3	1277	焼失	焼失	焼失
弘安8	1285	再建	(再建年不明)	(再建年不明)
嘉暦2	1327	焼失	焼失	焼失
応永5	1398	(再建年不明)	再建	再建
享保2	1717	焼失	焼失	焼失

図7 中室の柱配置復原模式図